

第7回鳥取市スケートリンク検討委員会 会議概要録

平成26年3月25日（火）午後1時30分～3時30分
市役所本庁舎6階第一会議室

出席：委員：岩本委員、大谷委員、川口委員、木嶋委員
高井委員、林田委員、本名委員（50音順）
教育委員会：浅井課長、坂本係長、中島主事
欠席：委員：小山委員、藤野委員

1 開会

事務局：時間となりましたので、ただ今から、第7回鳥取市スケートリンク検討委員会を開会いたします。本日は、9名の委員の皆様の内、小山委員と藤野委員については御欠席ということでございます。9名中7名ということで、委員の過半数の出席をいただいておりますので委員会が成立していることを御報告いたします。

開会に当たり本名委員長より挨拶をお願いします。

2 あいさつ

委員長：皆さん、こんにちは。年度末のお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。一昨年の7月からこの検討委員会が始まりまして、今回一つのまとめということで、慎重にかつ多数のご意見をいただきたいと思っております。

オリンピックも終わりましたが、いよいよ春になりましてスポーツの季節です。一年を通して、鳥取県の県民のみなさまのスポーツの楽しみと体力向上、あるいは経済効果も含めていろいろ検討してまいりました。事務局も更にいろいろ検討を続けていただきまして、ありがとうございます。今日も忌憚ないご意見をいただきまして、今後の鳥取県のスポーツのあり方の一つとしてこのスケート場について検討していきたいと思っております。どうぞよろしくをお願いします。

事務局：では、これより以降の議事進行は、設置要綱により、委員長が議長を務めることとしておりますので、よろしくをお願いします。

3 説明事項

(1) 報告書案について

※事務局が資料により説明

《質疑応答》

委員長：これまで、いろいろな課題、項目についてご検討いただきました。全体、どこからでも結構ですが、ご意見、ご質問をお願いします。

川口委員：細かいことですが、用語の関係です。まず、報告書案の8ページ、「日本のトップスケターと強い子弟関係にある鳥取市スケート界」というのは、岩本委員、言い過ぎな気がしませんか。「強い絆」ぐらいでどうですか。

岩本委員：それでいいと思います。

川口委員：それから、規格の問題なので決まっているかもしれませんが、10ページの国際規格という用語は、単純にいうと、世界大会、国際大会が開催できるようなイメージにつながるの、贅沢だという印象をあたえてしまうかもしれない。標準規格といった表現は適切ではないか。やはり国際規格といわなければいけないのか。

岩本委員：公式規格でどうか。

事務局：そこは、確認させていただきます。

川口委員：最後に、これは意見ですが、今、鳥取県では、2020年の東京オリンピックに向け、いろいろな競技で、できるだけ拠点施設を考えながら、日本の代表、ジュニアも含めて合宿の拠点としたいという取組を行っている。このスケートリンクがそういうことになるのか、ならないのか。もしも可能性があるのであれば、それをどこかに表記して、より積極的にイメージを、特に鳥取県との関係あたりを入れるといいのかなと思いました。一定の鳥取県からの支援というものがあれば、なおさらよい。

岩本委員：可能性は大いにあると思います。今回、ソチオリンピックの場合でも、日本チームは、他の国で練習して、試合前に入るといった形をとっています。今度の韓国の平昌でのオリンピックに関しましても、韓国が一番近いのは日本ですし、整備がされ、交通網も便利ですので、かなり各国の選手が利用されるのではないのでしょうか。特に、鳥取の場合は、一番近い。

川口委員：平昌は、若桜町とも友好提携を締結している。そういうルートを活用する。

施設は、メジャーなもの、豪華なものでもなくてもいいが、中身、ソフト面はしっかりしたもの、メジャーなものと考えられることが必要。

岩本委員：大きな大会を鳥取でやりたいという希望がある。経済効果ということも考えていただく。今回、今月の28日から30日まで、中国・四国のフィギュアのブロック選手権大会を行うわけですが、主管が鳥取に回ってきて、どこでやるかということ、鳥根でやるしかないということで、現在は鳥根のリンクをおさえて行く。正直いって、みなさんに迷惑をかけている。まずホテルがない、食事するところもない、非常にへんぴなところにリンクがあるわけです。ホテルに役員が泊まったら、他の選手は泊まれないということで、やはり鳥取で行うことができれば、それこそ経済効果も大きくあがるのではないかと考えます。

委員長：要するに、間借りしないとできないという状況になってきているということか。

岩本委員：そうです。

事務局：副委員長からのご意見、2月の定例市議会の一般質問の中で、鳥取県の新たなスポーツ、知事部局に移されるということで、県の方針に従うような市としての新たな取組があるのかという趣旨の質問をいただきました。その中で、平昌のオリンピックを控えている中で、県が進めておられる合宿の誘致、例えば、市の施設でいいますと、とりぎんバードスタジアムがサッカーの候補として挙がっていることを紹介させていただきながら、平昌のオリンピックを控えて、市では、このスケートリンクの整備も検討しているということも合わせて、今後の県の動きにも積極的に参加していきたいという教育長の答弁をしておりますので、その辺のことも、先ほど、その他配慮すべき事項で県との連携というところに、追加で付け加えさせていただくということによろしいでしょうか。

岩本委員：よろしいです。

大谷委員：朱書きになったところについて、スケートリンクの必要性ということで、体力、運動能力の減少、それから、社会体育施設の意義という中で、鳥取県は、体育館は全国1位なのに、なぜ体力が低いかということです。このあたりでみると、施設はあるのに、冬季の施設を作っても同じことではないかということになってしまい、この全国1位という数値が、このデータでいうと逆に威張ることができない、施設を活かしきれてないということになる。あらためてスケートリンクを使っても、本当に体力向上につながるのか、他のスケートリンクがある県と比較して、スケートリンクがある県は頑張っているという数字が表せればいい。スケートリンクの必要性を謳ってある中と施設の中でもっと活用するという指導を見込んで書くことが必要。ただ、施設の数が一番なのに、体力が落ちているということであれば、作っても意味がないのではないかとわれやしないかということ。

それから、報告書案7ページの競技者の現状ということで、これまでの成績の経過が書かれているが、鳥取にスケートリンクができた場合に、指導者体制がこうですよと言えるようなことがあれ

ば追加していただきたい。ただ箱物ができたからきてくださいというのは、レジャーとして来られる方はいいですが、そうではなくて、競技人口を増やしていこうとなったら、先ほどのトップスケーターとのつながりがあるからこそこういう指導者がいる、優秀な方を呼び込める優位性があるということを謳うべき。トップスケーターとつながりがあるというのは、その仲間だけの話なので、一般市民、県民からみたら、私たちは関係ないと感じてしまう。それよりも、こういうトップスケーターとつながりがあるからこそ優秀な指導者が今現在いるし、逆にこれまでのつながりがあるから指導者を確保できるということを書くべき。

岩本委員：連盟としてのお願いで、これは教育委員会にもお願いに行きますが、スケートリンクができましたら、土曜日は、小学生無料などとして、いつでも子供たちが滑れるような環境を作りたい。そのための指導者というのは、おかげさまで連盟のほうにはたくさんおります。正直いいまして、他の県の連盟は、ほとんどインストラクター任せです。ですから、スケート教室というのが、他の県の連盟は、年間1、2回行事として行っているぐらい。あとは何もやらないというのがほとんどですが、鳥取の場合は、連盟主催で毎週土日にスケート教室を行っていましたから、そういう点で、子供たちがいつでも滑れる体制ができていた。指導者の体制というのは、おかげさまで整っている。

大谷委員：要は、指導者がいるにも関わらず、施設がないから宝の持ち腐れみたいなどころがあるということが一つということ。

川口委員：それから、スケートリンクが整備されたら、それを契機に絆を利用・活用して、より国内のトップの指導者との連携ができ、あるいは、外部指導者として招聘ができるということがいえる。

大谷委員：経済波及効果で、NHK杯などの大きな規模の大会は別として、鳥取にスケートリンクができて、中四国規模の大会をするとき、大会の競技人口、集客規模を示して、これだけのお客が呼び込めることができ、逆に、今はスケートリンクがないからお客がとられているといったことを書くべき。そのようなデータが、アイスホッケー、フィギュア、カーリングでもあるでしょう。こういった経済波及効果を、額はともかくとして、一つの大きなコンベンションができるということ資料として出すべき。

もう一つは、オリンピックの平昌には時期的に厳しいのかと思うが、そういったときにキャンプとかでどのくらいの方が呼び込めるのかということを書くべき。

川口委員：でも、せっかくスケートリンクを作るのであれば、平昌オリンピックを視野に入れたほうがいい。

大谷委員：定量的なデータというものがあつたほうがいい。

委員長：例えば、指導者についても、一つは、初心者や一般の方々に対する指導者がいるということ。そういう意味では、リンクがないというのが宝の持ち腐れということ。更に、競技者に対するより高いレベルの指導が、東京からでもおいでいただいて指導できるという部分をもう少し加えてまとめていく。

もうひとつ、今、大谷委員からありましたのは、経済効果としては、ホッケーやフィギュアなどの競技の地方大会が開催された場合、集客について、例えば集客数が200人で何泊するなどがあれば、様々な取組の中で、具体的に年間どのくらいの経済効果がでるのかが分かる。

また、今ありました平昌オリンピックのキャンプで使用されるということもある。

木嶋委員：ちょっとずれるかもしれませんが、宿泊施設の面で、公共の宿泊施設は、遅れているような気がする。砂丘サイクリングターミナルに宿泊しても、民間の安いところと値段があまり変わらない。県外者の場合は、そういう計算になる。鳥取市の方が使われる場合は安くなると思うが、県外から人を招くということになると合わせて宿泊施設の整備も必要になると思う。

スケートリンクを使った大きな大会を開催しようとする、民間の宿泊施設だけでは賄いきれないのが現状。

委員長：今言われたことは、他のスポーツの大会でも当てはまること。もう少し安くて長く泊まれるようなところがあればいい。

木嶋委員：他のスポーツの大会をしようと思ってもなかなか宿泊施設が確保できないのが現状なので、どうしても民間のホテルを使わざるを得ない。

川口委員：ルールがあるわけではないが、全日本代表でも、外国の代表でも、誘致しようと思えば交渉が始まる。向こうも条件を提示してきますし、こちら側もこういうことであれば受け入れます、こういう条件を出すからぜひ来てくださいといった話が始まるわけです。例えば、ジャマイカの時には、宿泊費は基本的には向こうに払っていただいたが、一定額を超えたらこちらが出した。また、関空から鳥取までの交通費はこちらが出したなど、条件提示をしながら最終的な折り合いが付き、来ていただいた。施設があるから単に来るというわけではなくて、向こうにもいろいろと事情がありますので、県と市が連携してキャンプを誘致するために、施策・事業としてどう向かっていくかで変わってくる。木嶋委員がおっしゃるように、宿泊代が高いとかいった話が出ている。今言った配慮で、今まででしたら行っている。

岩本委員：設置場所についてはどうなのか。

委員長：設置場所については具体的なことは書いていない。

岩本委員：非常に交通の便がいいところが一番いい。できればまちなかがいい。まちなかが今どこの市も空洞化していますので、スケートに限らず、ホッケーやサッカーにしても、まちなかでそういう施設を建てて活性化する方向に変わりつつあると聞いております。

川口委員：結局、報告書案の14ページの立地条件というところになるんですね。どこに立てるとははっきりとは言えないが、公共交通機関等の利便性の非常にいい場所がいい。特に、子どもを対象とした場合は、親に送り迎えしてもらえば別だが、自分たちで行くということになると公共交通機関がある程度整備されている場所でないといけない。もし入れるとしたら14ページ⑦の(ア)になるわけですか。

委員長：(ア)のところにもっと集まりやすく、行きやすい利便性の高いところ、あるいは、他のスポーツ施設と連携できるような場所といった表現があってもよい。

川口委員：余談ですが、かつてスピードスケートの選手がワールドウイングに訪れた時に、もしも鳥取にスケートリンクがあればキャンプ地とするということを全日本が言っていた。それは、ワールドウイングとの連携の中でそういった話が出てきた。ずっと昔の話ですが。

岩本委員：黒岩選手の頃ですね。以前、リッチランドでスタートの練習だけはしていた。スピードスケートでいえば、今までもたくさんの選手がワールドウイングに来ています。リッチランドでは、ロングができなかったので、スタートだけを練習していた。

事務局：一応、交通のアクセスについては、報告書案の15ページの(ウ)で、公共交通機関による来場が可能であることとか、近隣にトレーニング施設があるといった記載をしている。

大谷委員：前回の会議でもそうでしたが、管理を直接行うか、指定管理で行うかはともかくとして、採算ベースはなかなか難しいという話がありましたよね。だから、どこが行うにしても費用対効果がどうなるかなど収益性の話は報告書には書いていないですね。

事務局：報告書20ページ⑤支出見込の欄に、60×30mの国際規格を整備するとだいたい10億円ぐらいかかるということで、そのレベルの施設ですと、年間約6,000万円程度の支出が見込まれると記載をしております。そのうえで、利用の見込みといいますのは、16ページ(4)②の中で、利用者見込というの、年間約18,000人から35,000人程度の利用者数が見込まれるのではないかと記載している。従いまして、一番少ない18,000人の利用者数にした場合、利用料金の設定を19ページに書いていますが、一番少ない18,000人で想定の利用料金を適用すれば、年間で3,900万円程度の収入が見込まれるということです。この場合、支出6,000万円に対して収入3,900万円と若干赤字になります。

大谷委員：20ページに収入見込と支出見込があって、あえて比較どうこうとは言わないということか。

事務局：そうです。

大谷委員：採算ベースがどうこうという話ではなく、そういう施設ではないということか。

事務局：そういうことです。ただ、16ページで見込んでおります、参加率1%から2%のレジャー白書の数値を基に、以前の検討委員会の中でも、利用者がどの程度あるか委員会の中でも紹介しましたが、1%であれば利用者数18,000人、2%であれば35,000人の利用者数が見込まれる。2%の人が来れば、20ページの収入見込の6,300万円程度の収入となる。そうなれば、支出が6,000万円ほどですので、300万円程度黒字になるのかなと考える。

大谷委員：あえて黒字とは謳わないということですね。マイナスがどうこうではなく、それを上回る教育効果などで謳っていくとのことですね。

川口委員：公共施設、教育施設としての役割をとということですね。

事務局：最初の事務局の説明の中で、22ページのまとめ(2)の中で、もともと③で、年間何万人利用者があれば、黒字となると書いていたが、報告書の中では落としました。

木嶋委員：レジャー施設としての位置づけはどうなるのか。

委員長：土曜日、日曜日に保護者も含めて一緒に遊ぶといったこともできる。競技としては別に時間をとる。

運営の中で、指導体制とか、行ってみて楽しかったなど、安全管理も含めて特徴を出していくのは、集客の新しい道だと思う。競技人口だけではなく、幅広く楽しんで、そこから競技に入るという子ども達もいると思いますので、指導体制の特徴を出していく。

大谷委員からもありましたが、体育施設が他にあって、なかなか利用が伸びないという部分がございますので、その部分の書き込みを一つお願いしたい。

木嶋委員：利用が伸びないのではなくて、子ども以外の方も使っておられるからではないのか。

委員長：子ども達はやはり利用する時間が決まっています、そういう意味では、子ども達は、学校の体育館以外なかなか利用できる状況ではない。こういう新しいスポーツの中で、子どもたちはもっと楽しいことを経験する、そういった意味ではやはり必要な施設。

林田委員：スケートリンクができて、市が、各小中学校に、スケートリンクを一年間か二年間か必ずスケートリンクに足を向けさせて、スケートの体験をさせるという項目が、この報告書の中のどこにあるのか。そういった活用の仕方も入れるべき。

さきほど委員長がおっしゃられたように、やはりスケート教室に入って、スケートの楽しさを知ってというのも一つのスケートの楽しみ方だったり、スケートをやってみようという子どもたちの魅力になる。スケート連盟などが主体となって、施設と一緒にスケート教室を行う。

委員長：例えば、報告書案の22ページ(2)の運営方法の中に、項目を挙げるかどうかは別として、教育施設として、小中学生には、必ず冬季スポーツの一つとして体験させる。体育の授業の一環、健康づくりの一環として利用させることが望ましいという一文があってもよい。

実際、やってみて分かるということがほとんどですので、スケートリンクを使った体験が鳥取の子ども達は今のところほとんど出来ませんので、ある意味夢が持てないということがありますので、その辺をまた考えさせていただきたい。

林田委員：やはりどのスポーツも、最初の指導なしで入り込むことはない。そういう部分では、大切。

岩本委員：東北や北海道は、授業の一環として必ずある。私が一番感心したのは、誰でもさっと来て、氷に触られるという機会を与えるのが多かったこと。だから、当たり前前にスケートは出来るし、スキーも出来るという形になっている。

林田委員：それと、最初に大谷委員から、スケートのトップ選手とか、絆などのことがありましたけれど、例えば、リッチランドの場合は、わかとり国体に向けて、施設として、連盟と一緒にあって、競技力の向上を進めるべきではないかということがありました。実は、当時、ダイエーレジャーランドというのがありまして、仙台もそうです。羽生選手、荒川選手も仙台のリンクで育ったのですが、そこに鈴木明子選手のインストラクターの長久保さんがおられまして、この方にも鳥取で指導をしていただき、協力を得て、昭和60年のわかとり国体に向けて取り組もうとのこと、きっか

けは、ダイエーレジジャーを通じてのインストラクター協会との連携プレーで、施設連盟が主体となって鳥取の選手を強化するというのが始まりだった。その中で、JOCのトップインストラクターが含まれておりました。当時、日本大学の無良隆志選手が、鳥取に縁があるということで、インストラクターになって、最終的には、無良隆志選手が指導者となるスケート教室に発展していったという経緯があります。

まずは、鳥取の子どもたちのためのスケート教室にトップインストラクターが指導者として入る。
高井委員：おおむねこの内容でいいと思う。報告書案8ページ⑤鳥取市のスケート界とトップインストラクターの関係というところで、鳥取は本当に他の県に比べて特別なものなのかどうか。

岩本委員：特別です。

高井委員：経済効果というところで、何か開催する時には、観客席がやはりないといけないのかなと思う。湖遊館は移動式の観客席ですよ。

岩本委員：移動式です。

高井委員：観客席がないものを作った場合に、鳥取市でそれをやるというのは、可能なのか。

岩本委員：関西大学のリンクは、片面の観客席を設けている。できたら、そういう形で、大会の時は、仮設をすればいいと思う。

高井委員：建設コストのところで、観客席の可動式のようなものが入っているといい。可動式のようなものがないと、実際には、お客様を呼べないような気がする。経済効果がどの程度のものかを試算したうえで比較をしなければならないと思う。

岩本委員：リンクの規模によりますが、今まで計画してきたリンクの大きさがあれば十分できる。

木嶋委員：前回、消防法の問題とかがあったのでは。

事務局：用途上、「観覧場」になるが、立地が限られるだけ。移動式の観客席ということであれば、場合によっては、用途に合致しなくても特例のような形で建設できる可能性ある。

木嶋委員：そうなった場合、鳥取市内の市街地は無理なのか。

事務局：そういったわけではない。商業エリアであれば、「観覧場」を建てるのが出来ます。むしろ商業地に建てるべきだということになります。

委員長：観客席の問題は、今までも検討してきましたが、集客できる回数とかを考えると、リンクを主体に考えている。何らかの形で、移動式もあり得るとまとめるといい。

基本的に、日常的に使っていただくということを第一に考える。使いやすい指導体制やリンクが出来れば、一年を通して、アイスホッケーなどいろいろな競技に使っていただける。大きなイベントになると、もう少しスケールの大きいものでなければダメ。

大谷委員：報告書案の22ページのところで、建設方法、管理方法はこうだとまとめているが、このまとめ方はどうなのか。当然、こういったことを加味してということなのだろうが、配慮してもらいたいことというよりは、9ページにあるようなスケートリンクの整備に期待される効果のところで、こういったものでスケートリンクが必要なのだという書き方にしないと結論がぼやける。9ページの効果のところがまさに必要性の視点。さきほど出た、絆のところを前段に、肉付けしていただいて、まとめのところにはもう一度、しつこいようですが、県の体力向上を第一義に謳う。どんなものでもいいのではなく、建設方式、管理方式はこうですよという書き方にしないといけない。

委員長：その書き方でいいと思います。

林田委員：9ページと22ページが逆。

岩本委員：財源のことはどうですか。

大谷委員：財源は、事務局に考えていただきたい。

事務局：有利財源の活用のところを謳う。

委員長：なぜ必要か、できたらこんな効果がありますので必要ですというところを、まとめのあたりに持って行っていただいて、そのあと、必要であるという結論に至ったとし、建設方式、運用コス

トを書いていく。

全体として、いろんな項目、分野から検討していただきましたので、鳥取でこれからの県民の健康、スポーツ、経済効果、レジャーなどよりよく、住みやすく楽しくて、子どもを育てやすいという特徴を出していく。例えば、国体の有力な種目ですが、全く練習場所がないということもございませので、そういったことも含めて、視野を広げて、県全体のこととの関わりを考えながらまとめていただく。最終的には、どこかで県との関係も含めていただくことが必要になってくる。そこを鳥取市の教育委員会がリードしていく。

今回、ご指摘していただいた部分については、事務局で修正をかけていただいて、私もまとめを手伝い、事務局で最終的にまとめていくということでのよろしいか。

(異議なし)

2 その他

事務局：委員のみなさまにお集まりいただいて、こういった格好で会議を行うというのは、今回が最終ということで、本日いただいた意見を早急に事務局のほうで修正を行い、送付し、各委員の皆様に見ていただいてとりまとめ、委員長、副委員長から教育長のほうに提出していただく。その後、新しい市長のもとで、具体化にもっていけるかどうかは、市の執行部の中で協議をさせていただきます。

委員長：基本的には、報告書案の9ページが必要性の理由となる。

それから、その中で、一つは、県民の体力づくり、健康づくり。小中学生の体力が落ちているということを考えなければならない。

体育施設の利用を促進するとともに、新しいスポーツの中で冬季、雨の時でも利用できる環境を整える。

また、競技力の向上について、国体の結果を見ればわかるが、施設が無いことによって競技力がどんどん低下してきていて、今しておかないと指導体制が維持出来なくなってしまう。今のところいい指導体制がありますので、一般、初心者の方に冬季のスポーツを楽しんでもらうことともう少し高いレベルの競技人口のレベルの底上げを行う。

レジャー的な面では、本当に活用できる。

経済波及は、なにか魅力があれば、人は集まる、現在鳥取市の人口は下げる一方でありますので、何か手を打たない限りこのままいきます。砂の美術館も当初、いろいろと批判もありましたが、多くの方々が集まっている。よそにないものがあれば、鳥取に人が集まる。

総合的な判断で、スケート場が必要。それに続けて、報告書案の22ページで建設方式などを書いていく。

指導体制が非常に重要になってきますので、もしスケートリンクが出来ましたら、スケート連盟の方には様々なご協力をお願いしたい。

鳥取市民、県民のためによりよい施設ができたらいい。

5 閉 会

委員長：本日はこれで終わります。ありがとうございました。